週刊観光経済新聞
宿泊・旅行業・運輸・自治体（観光全般）

話題の宮崎観光を探る

第二部

今年1月の東国原英夫知事の誕生で、連日テレビなどマスコミに登場する宮崎県。知事のマニュフェストのひとつに県外観光客を年間で5%増やすことを挙げられ、県民総力戦として観光客誘致に取り組んでいる。すでにGWまでで観光客も顕著に増加している。今回の特集では、知事効果による宮崎県観光の現状と、夏期の注目現地ツアー、下期に登場する現地ツアーを紹介する。

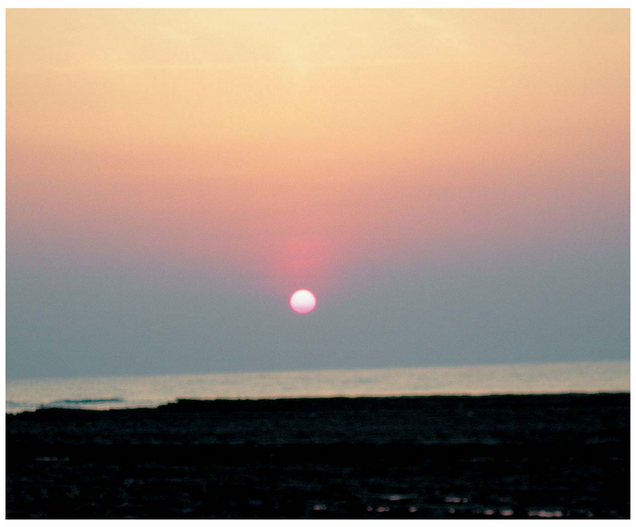
宮崎県観光特集

東国原知事ブームで人気の県庁見学ツアー

今年1月に東国原知事が誕生し、各種メディアで、地鶏や完熟マンゴーなどの物産と宮崎の観光地を紹介したことで、一般への認知度が高まった。実際、旅行会社では、県庁見学コースなどを折り込んだ旅行商品が発売されている。また、夏休み商品や下期商品についても、現地ツアーや現地ツアー付きの宿泊プランなどが造成されている。目下の人気ツアーは県庁見学コースで、4月からの開始2カ月で約1万7千人が訪れている。県庁見学ツアーは、基本的に県庁の開いている平日に予約制で行っている。休日は、開放されている玄関前や知事の等身大パネル前での記念撮影のみ可能となっている。事前予約があれば県庁の観光・リゾート課職員にガイドしてもらえ、県庁前の駐車場に大型バスも停められる。台数は2台。コースはおよそ1時間。入り口に設置してある見学ツアーのチラシを見ながら見どころをめぐる。前半の30分程度で、全国で4番目、九州で一番古い県庁の概要を中心に、うんちくを織り交ぜた内容。テレビで登場する知事室前の廊下などはさながらロケ地巡りツアーのような楽しさがある。東国原知事に会えるかは運次第となっているが、朝8時45分にツアー予約を入れて、登庁待ちで知事との対面を狙う旅行会社も多いという。県外観光客にはツアー終了後に知事からの記念のメッセージカードがプレゼントされる。事前予約のない場合は、ガイド無しの見学となる。後半の30分は、みやざき物産館へ移動。まさに話題の地鶏や完熟マンゴーなど買い物することができる。県庁見学コースは無料となっている。

また知事公舎見学も予約制で行っている。住宅街にあるためバスから10分程歩いていくケースが多いという。建物見学が中心で、一般公開時は防災センター機能部分の見学やスポーツキャンプに訪れているチームのユニフォームなどが展示された。元々、宮崎は、GW後から夏期がボトム期間ということもあり、知事ブームの観光客を受け入れることができたが、秋口からの下期は、トップシーズンとなるので、交通や宿泊について今年は特に早めの手配が必要となることが予想される。

宮崎県庁舎（本館）は1932年（昭和7年）に建設。九州では唯一の戦前から残る県庁舎で、現役で県政の中心を担う。



左：大人気の県庁見学ツアー　右上：青島の日の出　右下：サーフィンスクール

青島地区の現地ツアーが本格スタート

宮崎県では、近年、長期滞在や個人、小グループ客対応の観光地づくりが県内各地で官民一体となって進められている。青島地区では昭和30年代に130万人が訪れていたが近年は約20万人。そんな青島に観光客を呼び戻そうと行政、地域住民、観光関係者が連携して新しい観光ツアーを開発している。今年の夏期でいえばサーフィンを中心にマリンスポーツ、リゾート地を意識したアクティビティへの取り組みが注目を集めている。下期に向けては、青島神社の全面協力を得た、青島日の出見学ツアー「スピリチュアルモーニング」が商品化に向けて最後の調整に入っている。

マリンスポーツでは、青島サーフィン&ボディボードビギナーズスクールが6月から10月までの毎日開催される。運営は、青島観光六社会、NPO法人サーファーズネットワーク。宮崎県、宮崎市、みやざき観光コンベンション協会、宮崎市観光協会、青島地域活性化検討会議が協力している。マリンスポーツを呼び水に、行政と観光関係者が協力して、観光活性化を図る取り組み。

昨年夏、青島パームビーチホテルが同様のスクールを実施したところ、約500人が参加し県外客の評価も高かった。今年は、地域ぐるみで、青島観光ホテル、青島グランドホテル、青島サンクマール、青島水光苑ホテル、旅荘地蔵庵の5ホテルも参加し、窓口となる青島サーフィンセンターを設置する。センターは、青島パームビーチホテルに設置。団塊の世代やサーフィンになじみが薄い若者向けに、気軽に体験できる観光プログラムとしてPRしている。センター前のビーチの波は初心者向けで講師は生徒2人に1人が付くか、マンツーマンなので、自分のペースでサーフィンを無理なく覚えられる。ボードに立てるまでを目指し、講習後にはほとんどの人が波に乗れるようになる。「せっかく宮崎に来たのだから海に入る。帰りにはサーファーの仲間入りをした気分になり、非常に満足を得られる」（同センター）という。また、講師は接客の研修も受けており、対応もソフトで親切な印象だ。サーフィン以外にも、ボディボードとウインドサーフィンのスクールがある。料金は、サーフィンが2時間で5000円。ボディボード3500円。ウインドサーフィン7000円。ウエットスーツ、ボードレンタルと保険料込み。定員はサーフィン16人。ボディボード20人。ウインドサーフィン4人。対象年齢は、小学4年生から70歳まで。ボディボードとウインドサーフィンは小学1年生から70歳まで。ただし、小学生は保護者の同伴が必要。予約は、先着順で前日の17時まで。予約問い合わせは電話（0985・65・2947）。

また、青島パームビーチホテルでは、4輪バギーレンタル、セスナ遊覧飛行、ヒーリングヨガ講座などの案内を行うアクティビティセンターも開設。豊富なアクティビティメニューにより宿泊客の快適な青島滞在をサポートする。

癒しの観光ツアー「スピリチュアルモーニング」

青島の日の出を見て心をきれいにして青島神社に参拝する心の癒しを求める観光ツアー「スピリチュアルモーニング」の準備も進んでいる。すでに地元の宿泊業者と大手旅行会社を対象に商品化に向けてモニターツアーを実施している。ツアーの内容は、早朝の朝日が上がる前に青島の海岸に集まり日の出を鑑賞。曇りの日はガイドが日の出の写真を配る。次に青島に多く流れ着く縁起の良いタカラガイを拾う。タカラガイは、コヤスガイとも呼ばれ安産のお守りにもされる。次に境内に移動、神社の祀る山幸彦の神話を聞き、拝殿でお参り。厳かな雰囲気の中で朝から神楽の奉納を見られる。さらに鎮魂を体験。鎮魂は静かに心を落ち着かす動作。次に産霊（むすひ）こよりを境内の綱に結び付け、願いをかける。こよりは5色から選ぶ。紫は心身の健康。緑は生業成就。黄色は商売繁盛。ピンクは縁結び。白は心願成就。朝食は海を見ながら境内で食べられる。カフェテラスのようだと評判だそうだ。朝食の材料は青島獲れの海の幸。本格的な商品化に向けて雨天会場を検討している。

同会の会長を務める長友安隆宮司は、「地域の一員として協力している。鎮魂などの評判が良かった。検討会儀では20のプロジェクトがあり、県内の若手アーティスト、空き店舗、個展を開く「アートイン青島」、県立亜熱帯植物園でのライトアップイベント「キャンドルライトアップ青島DEナイト」なども開催した。青島神社では巫女体験、神職体験も行える」と話す。

これまで「神話と伝説のくに宮崎」としてPRしてきたものに、ブームとなっているスピリチュアル（霊的な心の癒し）の視点を加えて、新しい宮崎の観光のスタイルを提案している。宮崎県でもスピリチュアルカウンセラーの江原啓之氏に監修を依頼したパンフレットを発行する予定となっている。

今年1月に東国原知事が誕生し、各種メディアで、地鶏や完熟マンゴーなどの物産と宮崎の観光地を紹介したことで、一般への認知度が高まった。実際、旅行会社では、県庁見学コースなどを折り込んだ旅行商品が発売されている。また、夏休み商品や下期商品についても、現地ツアー付きの宿泊プランなどが造成されている。

スピリチュアルモーニングモニターツアーの朝食時の様子

奥宮崎で地域連携

西米良・西都・綾を結ぶ森の仲道

宮崎県のアクセスと森の仲道ロードマップ

宮崎県内の広域連携の大きな取り組みのひとつが西米良村、西都市と綾町3市町村連携。宮崎の観光ルートが日南海岸など南北の海岸線のイメージが強いのに対して、内陸部の山間部観光地を結ぶ回遊ルートを提案する奥宮崎広域観光協議会を立ち上げた。

元々、西都市は西都原古墳群と桜、「コスモスなど花の名所として、また綾町は体験型工房施設「酒泉の杜」や照葉樹林、吊り橋で知られる県内有数の観光地。観光客の入り込みも高千穂に次いで、西都原古墳群は2番目、酒泉の杜は3番目に多い。西米良村は、「カリコボーズの休暇村・米良の庄」として知られ、宮崎県で唯一黒木定蔵村長が、観光カリスマに選ばれている。交流人口を目的とした西米良型ワーキングホリデーや民話の語り部など物語性とテーマ性を持たせた観光事業で、村おこしを成功している。平成16年の西米良村の観光客数は12万5933人。西都市の観光客数は122万6010人。綾町は100万6990人。旅行商品では、西都市と酒泉の杜に代表される綾町は団体客の受け入れに優れた観光地。西米良村は、小規模で団体客の受け入れには適していなかった。さらに西米良村には、熊本県の人吉方面からの入り込みが多いこともあり、宮崎の他の観光地とルート化されていなかった。酒泉の杜はオープンから10年が過ぎ、今でも年間85万人の観光客が訪れている。綾町の観光収入は年間で約20億円。酒泉の杜はその内15億円を占める。西都市には、多くの観光客が訪れているが道の駅がなく、観光による経済効果を逃しているという。西都市と西米良村を結ぶ道路も整備が進み、大型バスでも規制をすれば通行ができるそうだ。

今回の協議会の取り組みでは、個人や団体客、旅行会社に向けて新しい魅力を掘り起こした観光ルート「森の仲道」を作り、奥宮崎エリアという広域連携によって生まれた新エリアが一体となって観光客の誘致を図っている。

森の仲道は、宮崎空港、JR宮崎、人吉インターチェンジを起点または終点にインとアウトができるようにトライアングルの回遊コースとなっている。1年を通じて、季節毎にテーマを持たせている。2月から3月はひなロード（雛の道）、3月から4月はチェリーロード（桜の道）、4月から5月はてるはロード（てるはの道）、5月から10月はリバーロード（川の道）、7月から8月はセタロード（たなばたの道）、10月から11月はマイスターロード（工芸の道）、11月から1月はふるさと味ロード（食の道）。テーマに合わせて、植樹や関連イベントが行われるという。昨年7月には、九州から報道関係者を集めたプレスツアー、12月には東京方面から旅行会社を対象のモニターツアーを実施している。観光案内の入ったロードマップを5月に作成。宮崎市内の旅館ホテルにも設置している。

森の仲道の一部は旅行商品に採用されているほか、今年度下期の

奥宮崎モニターツアーの様子　酒泉の杜全景

JTB「日本の旬」の目玉であるウンコインバスのコースのひとつに設定されることが決まっている。

近年、旅行形態が団体から個人、小グループにシフトしたなか、景気の回復や団塊世代の大量リタイアで、団体旅行も復調している。「今後は従来の物見遊山ではない、個性化した団体、深みのある個人客が今後の観光客のニーズになる」同協議会山本達雄事務局長（酒泉の杜・綾陽亭常務取締役総支配人）は話している。

ツーリズムや団体客対応、旅行会社や観光関係者とのパイプ、宿泊施設など各地域の特徴を生かし、弱点を補いながら、各地域の魅力を結び、強みとして今後も奥宮崎ブランドの構築や観光客の誘致を行っていくという。

酒泉の杜は、団体客と焼酎試飲施設のイメージが強いが、宿泊施設である綾陽亭は、高級タイプ。JTBアンケートでも90点以上の評価を受けている。酒泉の杜の中で利用するのは、陶芸、次いで綾手袖の体験工房が多い。個性化した団体、深みのある個人客というトレンド分析は、現場からの声。奥宮崎地域は本気の取り組みを始めている。宮崎県内の広域連携の大きな取り組みのひとつが西米良村、西都市と綾町3市町村連携。宮崎の観光ルートが日南海岸など南北の海岸線のイメージが強いのに対して、内陸部の山間部観光地を結ぶ回遊ルートを提案する奥宮崎広域観光協議会を立ち上げた。

元々、西都市は西都原古墳群と

問い合わせ先
（財）みやざき観光コンベンション協会
宮崎市宮田町3番地46　県庁9号館
TEL.0985-25-4676　http://www. kanko-miyazaki.jp
宮崎県観光・リゾート課　宮崎市橘通東2-10-1
TEL0985-26-7103　http://www.pref.miyazaki.jp
宮崎県東京事務所　東京都千代田区平河町2-6-3
都道府県会館15階　TEL.03-5212-9007
宮崎県大阪事務所　大阪市北区梅田1-3-1-900
大阪駅前第1ビル9階　TEL.06-6345-7631
宮崎県福岡事務所　福岡市中央区天神2-12-1
天神ビル8階　TEL.092-724-6234